# 17［評論］『反教育論』

　脳科学者の氏は、「頭が良い」ということが、決して「記憶力が良い」こととイコールではないという重要なａシテキを行っている。

　池谷氏はまず、「記憶力」そのものは、下等な動物や幼い子供の方が成人よりもはるかに優れているという事実を述べ、さらに「の」を例にとって、正確な記憶というものがいかに役に立たない代物であるかを論じている。

　百舌がストックとして木の枝に刺しておいたカエルや昆虫などの獲物は、写真のごとき正確さでその木の枝の場所を記憶するために、のちにその木の葉っぱが一枚落ちただけでも、百舌はストックした木であることを同定できなくなる。それゆえストックしておいた獲物は、往々にしてそのまま置き去りにされてしまい、そのままミイラ化することになる。これが①「百舌の速贄」である。

　このように、正確な記憶力とは、それが正確であればあるほど物事の本質をｂハアクすることを妨げてしまう。つまり、「頭が良い」ということを構成するのは、このように応用の利かない②した記憶力ではなく、あいまいさや柔軟性に富んだ経験記憶の方なのである。

　この能力は、経験を積み重ねることによってどんどん磨きがかかっていく性質のものなので、徐々に結晶が成長することになぞらえて「③結晶性能力」と呼ばれている。しかし、百舌に見られるような正確な記憶力の方は、加齢とともに低下してしまうもので、その意味でこちらは「流動性能力」と呼ばれている。

　今日の社会において、入試や資格試験など多くの場面で試されているものは、このいわば知性の④原始的な側面である「流動性能力」にひたすら偏ってしまっているのが実情である。私自身の経験から思い起こしてみても、大学入試でも医師国家試験においても試されるのは知識や解法パターンの暗記力であり、「バカになったつもり」で本来の思考力や懐疑的精神を停止させ、ｃボウダイな丸暗記をしなければクリアできないのものであった。もちろん、そんなふうにして詰め込んだ知識などはすぐに消失してしまって、のちのち何の役にも立たなかったことは言うまでもない。

　現代社会が、このように⑤「流動性能力」を測定する試験ばかりを重要視していることは、社会そのものを内部崩壊に導く原因となりかねない深刻な問題である。つまり、いわば原始的な知性ばかりが重視され、社会の重要なポジションには真の思考力を持つ人間がｄメッタに見当たらないといった、とてもｅキミョウな社会が作り出されてしまうからである。

　社会がこのような基準を元にさまざまな選考を行っている以上、子供たちに施される教育が「流動性能力」の育成に偏ったものになってしまったのは、避けがたいことであったかもしれない。しかし、やはり⑥「思考停止人間」が次々と量産されてしまった根本原因のひとつがここにあることは間違いない。

●語注

ポジション＝ここでは「社会的な立場」という意味。

◆漢字

本文中の二重傍線部ａ～ｅのカタカナを漢字に直せ。

ａ〔　　　　　〕　ｂ〔　　　　　〕　ｃ〔　　　　　〕　ｄ〔　　　　　〕　ｅ〔　　　　　〕

問１　傍線部①の「百舌の速贄」の例は、何を言おうとして引かれた例か。本文中から三〇字以内で抜き出し、最初と最後の五字を答えよ。7点

〔　　　　　　　　〕～〔　　　　　　　　〕

問２　傍線部②の意味として最も適当なものを次から選べ。7点

ア　こり固まってしまった　　イ　忘れることのない

ウ　かなり衰えてしまった　　エ　何も覚えられない

オ　間違えることのない

〔　　　〕

問３　傍線部③とはどのようなものか。本文中から二〇字以内で抜き出せ。7点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問４　傍線部④とあるが、なぜ「原始的」というのか。その理由として最も適当なものを次から選べ。7点

ア　応用の利かない記憶力だから。

イ　簡単なことしか覚えられないから。

ウ　記憶できる数に限りがあるから。

エ　すぐに忘れていく記憶だから。

オ　蓄積していかない記憶力だから。

〔　　　〕

問５　傍線部⑤とは、具体的に何を「測定」する試験のことか。本文中から一五字以内で抜き出せ。7点

〔　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　　〕

問６　傍線部⑥とあるが、流動性能力を育成することが、なぜ「思考停止人間」を量産することになるのか。最も適当なものを次から選べ。7点

ア　流動性能力は、人間が本来持っている思考力や懐疑的精神を停止させないと育成できないから。

イ　流動性能力は、身につけるにしたがって人の思考を停止させる働きがあるから。

ウ　流動性能力を維持していくためには、結晶性能力の方を犠牲にするほかないから。

エ　正確な記憶力を育成する流動的能力と人の思考は、両立できないものだから。

オ　流動性能力の育成は、真の思考力を持つ人間の育成だけを目的にしているから。

〔　　　〕

問７　本文の内容と合致しているものを次から一つ選べ。8点

ア　人間の「記憶力」そのものは、幼い子供よりも成人の方がよほど優れている。

イ　百舌が獲物を置き去りにするのは、その場所をすぐ忘れてしまうからである。

ウ　「結晶性能力」は「流動性能力」と比べて、加齢とともにどんどん衰えていく。

エ　現代社会が流動性能力の測定に偏った試験を重要視しているのは問題である。

オ　結晶性能力の育成が、社会に「思考停止人間」を量産してしまう原因である。

〔　　　〕

【解答】

漢字　ａ指摘　ｂ把握　ｃ膨大　ｄ滅多　ｅ奇妙

問１　正確な記憶～物であるか（26字）

問２　ア

問３　あいまいさや柔軟性に富んだ経験記憶（17字）

問４　ア

問５　知識や解法パターンの暗記力（13字）

問６　ア

問７　エ

■覚えておきたい語句

□ 4　代物……………………ある評価（多く低い評価）の対象となる人や物。

□ 8　同定……………………同じであることを見きわめること。

□ 8　往々にして……………そうであることが多くて。そうなりがちで。

□19　類………………………同じような性質や種類のもの。

〔要　約〕

　具体例の［3］段落は使わず、結論に当たる［7］・［8］段落中心に要約する。

　　　　↓

流動性能力の重要視は、社会を内部崩壊に導く原因となりかねない深刻な問題である。それにより、「思考停止人間」が量産され、社会の中心には真の思考力を持つ人間がいないという、奇妙な社会が作り出されてしまう。（100字）

〈筆者＆出典〉泉谷閑示（いずみや・かんじ）一九六二年（昭和37）秋田県生まれ。東北大学医学部卒業。精神科医。東京医科歯科大附属病院などに勤務の後、現在、精神療法専門科「泉谷クリニック」院長。短大や専門学校の講師などを勤めるかたわら、作曲や舞台演出、テレビ出演など、幅広い活動を行っている。著書に、『「普通がいい」という病』などがある。本文は、『反教育論─猿の思考から超猿の思考へ』（講談社現代新書、二〇一三年）より。

【読みのセオリー】

★筆者は主張したいことを具体例で説明する

　筆者が具体例を出して説明するのは、自分の主張を読み手に理解してもらうためである。

　具体例の前後の段落に筆者が言いたいことが述べられている場合がほとんどである。具体例からその主張を理解できるときもある。

■読みのセオリー［実践］筆者は主張したいことを具体例で説明する

問１　「百舌の速贄」の例で、筆者は何をわかってもらいたいのか（次の空欄には同じ言葉が入る）。

［1］段落　「頭が良い」

　　　　　≠

　　　「記憶力が良い」

　　　　　　↓なぜなら

［2］段落［　　　　　　　］は役に立たないから。

　　　　　　↓たとえば

［3］段落　「百舌の速贄」がそのよい例だ。

　　　　　　↓このように

［4］段落［　　　　　　　］は本質をハアクすることを妨げてしまう。

〔解答〕　正確な記憶

☆「セオラム補充問題」　問題は、次の３種類があります。

　　＊差し替え　　　……該当の問と差し替えるもの

　　＊追加　　　　　……同じ問で、追加された問題

　　＊新問　　　　　……追加可能な新たな問題

＊新問

問　10行目「正確な記憶力」を言い換えた語句を本文中から一五字で抜き出せ。

［答］　応用の利かない膠着化した記憶力

＊新問

問　15行目「流動性能力」とは、どのようにものだと説明されているか。本文中から一五字以内で抜き出せ。

［答］　加齢とともに低下してしまうもの（15字）